Form HJ (S→O)

アジア太平洋研究科　博士学位論文要旨

留学交流により結束する地域 ～日本人のアジア域内留学によるアジア・シティズンシップおよびグローバル・コンピテンシー育成に関する研究～

学籍番号：4014S016　　氏名：眞谷 国光　　主指導教員 黒田 一雄 教授

Keywords :　地域内留学, アジア・シティズンシップ, グローバル・コンピテンシー, 高等教育の国際化

（論文の背景と目的）

アジア地域内における高等教育の国際的連携が急速に進展している。中でも、アジア域内留学交流の活発化が見られ、人々の交流が盛んに行われている。日本においては、アジア諸国の政府と共同で相互交流促進の施策を近年急速に展開しており、日中韓の地域的高等教育コンソーシアムであるキャンパス・アジアや東南アジアの地域的高等教育ネットワークへの参画である AIMS 等の事業の展開が行われている。そのような政策の追い風もあり、実際に、日本学生支援機構の統計によれば、日本から 2013 年には 13,492 人であったアジア留学経験者数が、2018 年には 45,303 人と約 3.4 倍になっていることが分かり、北米の 2.0 倍と比較しても非常に活発化している状況が理解される。

一方で、そのように量的な拡大は着実に発展しているものの、日本では、こうした留学に参加した学生の変容の質的評価は、政策的にも学術的にも、十分になされているとは言い難い現状がある。元々、日本人は、アジアに対する帰属意識や連帯感の意識が低いと指摘されてきた。アジア・バロメーターの調査によれば、日本人はアジア人意識が他のアジア諸国と比較して顕著に低かった。また、日本人は、長らく内向き志向であると指摘され、グローバルに活躍するための素養を身に付けることが必要とされている。日本人のアジア留学経験は、このような課題を克服する要因となりえるのか。本論文の目的は、そのように、アジア域内留学がアジア・シティズンシップ（社会的アウトカム）およびグローバル・コンピテンシー（個人的アウトカム）を育成するのかを、実証的に分析しそのインパクトを検証することである。

（研究方法）

アジア・シティズンシップは、アジア社会に対峙する意識を持ち、その中での自己の責任や役割を考える姿勢を持つという概念として定義する。また、グローバル・コンピテンシーは、個人能力開発のための指標であり、中でも近年重要だと理解されている非認知能力に着目する。国際志向性、コミュニケーション意欲等のグローバルな環境で特に求められる能力に加え、心理学的指標（ビッグ・ファイブ、グリット、統制所在の内的帰属、自己概念等）を含む基幹的な能力の 2 側面から成る概念として定義する。本研究では、その 2 つの概念を用いて、対象者の異なる 2 種の質問紙調査「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する調査」および「留学の効果測定調査」のデータセットを用いて分析を行う。前者は全国規模の調査であり、4,489 人の留学経験者のデータ（留学後の計測）である。後者は、早稲田大学 1 校の調査であり、967 人のデータ（留学前後 2 回の計測）である。いずれの調査もアジア留学経験者、アジア以外留学経験者、留学未経験者の 3 グループ間の比較分析を行う。

（論文の構成）

序章では、研究目的と背景、問題意識、リサーチ・クエスチョン、仮説等を論じる。第 1 章では、地域内留学交流の意義と近年の動向について論じる。旧来の途上国から先進国への「垂直な」留学および地域内の「水平な」留学の 2 つの違いを説明する。第 2 章では、地域内留学によるリージョナル・シティズンシップ育成に関する先行研究について論じる。アジアではそのような研究はほとんどなく、地域内留学の仕組みを早くから整えたヨーロッパの文献を参考にし、ヨーロッパ域内留学によるヨーロピアン・シティズンシップ育成の先行研究を概観する。第 3 章では、留学によるグローバル・コンピテンシー育成に関する先行研究について論じる。このテーマは欧米を中心に先行研究が多いが、特に非認知能力を含めた先行研究を概観し、本研究の趣旨に近い文献を整理する。第 4 章では、研究の方法を論じる。先行研究におけるアウトカムの定義と測定方法を改めて整理したうえで、本研究における主要概念の定義を行う。そして、その測定方法、実際の質問紙調査の概要、データ・サンプルの概略、分析の考え方等について論じる。第 5 章・第 6 章では、それぞれ、日本人学生のアジア留学によるアジア・シティズンシップそしてグローバル・コンピテンシー育成に関する調査の分析と考察について論じる。終章では、研究結果のサマリー、研究結果の学術的意義と先行研究への貢献、そして研究結果の社会的意義と今後の展望について論じる。

（結論）

第一に、アジア留学は、留学前後で、アジア・シティズンシップの値が有意に異なり、また留学未経験者と比較してその育成効果が確認された。その効果は 2 か月未満の短期留学においても確認され、留学期間の長さとはあまり関係がないことも確認された。また、ナショナル・リージョナル・グローバル各レベルのシティズンシップは、同時に高まることも分かった。さらに、アジア留学経験者と留学未経験者では、留学前の時点でアジア・シティズンシップの値が有意に異なり、国内における準備教育的なアジア地域研究教育の重要性を導き出すこともできた。併せて、アジア「以外」への留学についても、アジア・シティズンシップを育成する効果があることが確認された。

第二に、アジア留学は、留学前後で、グローバル・コンピテンシーの値が有意に異なり、また留学未経験者と比較してその育成効果が確認された。中でも、国際志向性やコミュニケーション意欲等は、留学経験により大きく育成されることが分かった。基本的に不変と言われる性格パーソナリティ特性のビッグ・ファイブの外向性・神経症傾向・開放性、そしてグリットの根気尺度、自己概念等も留学前後で有意な差が確認され、留学経験が大きなインパクトを持つことも明らかになった。また、比較的留学期間が長い方がそのインパクトが強いことが分かったが、同時に短期留学においても一部同様の効果が確認されることも分かった。そしてより早期の留学の方が、インパクトが概して強いことも分かった。さらに、アジア留学経験者と留学未経験者では、留学前の時点でグローバル・コンピテンシーの特に国際志向性に関する値が有意に異なり、上記同様、国内における準備教育的な異文化間教育の重要性を導き出すこともできた。

アジアの人的交流は、アジア地域への理解、貢献意識、帰属意識を高め、グローバルに活躍するための素養も育成される。このことは、ひいてはアジア地域の安全保障や平和をもたらし、かつ地域・地球規模の課題に取り組む人材育成に繋がっていくことが期待される。

[主要参考文献]

横田雅弘・太田浩・新見有紀子編著（2018）『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト―大規模調査による留学の効果測定―』学文社

Deardorff, D. K. (2006) "Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of Internationalization." Journal of Studies in International Education. 2006 10: 241.